インフィニットストラトスに原作ブレイク

林神録

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インフィニットストラトスに原作ブレイク

【Ｎコード】

Ｎ５９５３Ｚ

【作者名】

林神録

【あらすじ】

これはインフニットストラトスの原作ブレイクです。

入学1日目の午前

唐突だけど、俺には原作知識がある。つまり俺は転生者だ。

自分が転生者だと分かったのは幼なじみの一夏とＩＳに触れて起動させてしまった時だ。

・・・・・そろそろ現実逃避をするのはやめにするか。

俺は今もの凄く家に帰りたい。

別にホームシックってわけじゃなだが。

視線が俺と一夏に集中しているからだ。

しかも見ているのは全員女子だぜ。

誰だ！羨ましいなんて思ったの！

てな事を考えていたら。

千冬　「林！早く自己紹介をしろ！」

千ふ、織斑先生に言うわれた。

神　「あ、はい。え～と。俺は林　神録(はやしかみと)って言います。趣味は読者と料理だ。

これからよろしくお願いします。」

そういって席に座った。

ショートホームルーム終了。

一時間目

一　「全部分かりません。」

山田　「全部ですか」

おい。一夏流石に全部は無いだろ。山田先生困っているじゃないか。

千冬　「織斑。入学前に読む様に言っておいた参考書は読んだのか？」

一　「捨てました。」

スパーン

自己自得だな。

一　「だって、神録が捨てたって言ったから。」

そこで俺に振るな！

千冬　「本当か？林？」

神　「大丈夫です。内容は全部覚えていますから。」

『『『えっ！』』』

千冬　「ほー。じゃあ説明してもらおうかな。」

神　「はい。ＩＳとは～～～～」

キーンコーカーコーン。

神　「～～～～～と言うわけです。時間ですしもういいですか？」

パチパチパチパチ。

山田　「凄いですね。私なんてその半分しか理解できていないに。」

それは教師としてどうかと思うのだが。

一　「勉強を教えてくれ！」

「私にも勉強を教えて！」

「私も！」

は～～。

山田　「先生にも！」

果てしなく疲れるようだ。

「ちょとよろしくて？」

神　「あぁ？」

「まぁ、なんて返事の仕方の！わたくしに話しかけられたこと事態が光栄ですのに、その辺のこと分かってぐたさる？」

神　「済まないな。俺、君の事知らないんだ。一夏は知っている？」

一　「いゃ、俺も知らない。」

「何ですって！？このわたくし代表候補生で学年主席のシリア・オルコットをご存知ないのですか！？」

一　「なぁ。神録、代表候補生ってなんだ？」

神　「ＩＳオリンピック選手かな。」

一　「へ～凄いんだな。」

セシ　「そうですの！わたくしはエリートですの。」

神　「一夏。おだてるな。ウザいから。」

一　「悪い」

セシ　「本来ならわたくしのような選ばれたものと同じクラスになれたことは奇跡・・・・・幸運なのですよ、その辺分かってくださる？」

神・一夏　「「らっきー！」」

ダブル棒読み。

セシ　「あなた達バカにしていますの？」

神　「ソンナカトナイデスヨ。」

セシ　「まぁ、いいですわ。わたくしは優しいのであなた達のような人間にも優しく接してあげますわ。」

神　「優しくって言葉をもう一回調べてこい。」

セシ　「泣いてたのめばわたくしがＩＳについて優しく教えてあげますわ。なんせ唯一教官を倒したエリートですから。」

神・一　「「それなら俺も倒したぞ！」」

セシ　「なんですって！？」

一　「避けたら勝手に自爆した。」

神　「良かったな一夏。その人多分めっちゃ強い人だったと思うから。」

セシ　「わたくしだけと聞きましたが、まぁ自爆なら」

一　「女子の中ではってオチだろ。」

神　「ちなみに俺が倒すにかかった時間は３０秒だ。その後教官は泣き叫んでいた。」

セシ　「どうせあなたも運が良かったのでしょう。」

神　「いゃ、俺は刀で壁に張り付けてマシンガンを０距離で乱射して勝った。」

一　「えげつな！！」

神　「だってその教官がムカつく事を言ってきたからボコリたくなっただけたもん。」

一　「なんて言ってきたの？」

神　「男のくせにＩＳを使うじゃあ無いわよだって。セシリアみたいに言ってきた。」

一　「それは俺もキレると思う。」

セシ　「こんな屈辱初めてですわ！」

一　「少しは落ち着けって。」

セシ　「これが落ち着いていられ」

キーンコーンカーンコーン

セシ　「！！。また後できますわ、逃げないことね良くって。」

神　「良くねー。」

二時間目

一夏に勉強を教えてながら授業中。

「愛しの束さんから電話だよ。神録君の妻の束さんから電話だよ。」

空気が壊れた。

ハッハッハッハッハ！

誰だよ。マナーモードにしなかったの。俺？俺じゃあないよ。ちゃんと携帯をマナーモードにしたはずだから。

「愛しの束さんから電話だよ。神録君の妻の束さんから電話だよ。」

うん。俺の携帯から聞こえるね。

神　「織斑先生、どうすせばいいですか？」

千冬　「相手が相手だから出る事を許可する。」

神　「ありがとうございます。」

神　「はい。」

束　「電話に出るの遅いよ。放置プレーかと思ったじゃん！」

神　「間違いか電話か。」

「愛しの束さんから電話だよ。神録君の妻の束さんから電話だよ。」

神　「はい。」

束　「勝手に電話を切るなんて酷いよ。」

神　「束さん今こっちは授業中なんです。その辺分かっていますか？」

束　「もちろん。分かっているから電話したんだよ。」

神　「なおさら質が悪いわ！」

千冬　「神録、代われ。」

神　「了解です。」

束さんに説教中。

神　「おい。一夏次の休み時間、箒に声かけておけよ。」

一　「なんで？」

神　「だから鈍感って言うはれるだよ。」

一　「？？？？」

千冬　「は～。神録代われ。」

神　「了解。」

束　「神録君、神録君といっくんのＩＳは私が作ったのんあげるね。」

神　「それは嬉しいです。」

束　「良かった。神録君が喜んでくれて。」

神　「後、アレもお願いします。」

束　「良いけど何に使うの？」

神　「一夏を鍛える為ですよ。」

束　「過保護だね～。」

神　「そんな分けないじゃないですか。後、授業中は止めてくださいってもう切れているし。」

『束って篠ノ之博士！」

『どう言う関係なんだろう？」

『さっき妻って言っていたてことは夫婦！？」

千冬さんの出席簿アタック

ご苦労様です。千冬さん。

休み時間。

一夏は箒を連れて屋上へ行った。

俺は質問攻めだな。

『神録君、織斑君とはどう言う関係なの？」

セシ　「あなたは逃げなかったのですか。」

神　「え～と。一夏とは幼なじみだ。」

セシ　「聞いていますの？」

『じゃあ、どう言う本を読んでいるの？」

セシ　「・・・・・」

神　「基本的にアニメの小説を読んでいるが。」

セシ　「は～。もう一人の彼は逃げたようですわね。」

神　「何だとコラ！？」

セシ　「やっと返事をしましたね。」

神　「ちっ、で、何か用か代表さん。」

セシ　「あなたの幼なじみは逃げたようですわね。」神　「あいにく、キミのような小物かまっている暇はないんだよ。」

セシ　「こ、小物ですって！」

神　「落ち着けって小物。」

セシ　「人を小物呼ばわりして。代々あなたは」

キーンコーンカーンコーン

神　「帰れ。」

セシ　「まだ話しは終わってなくってよ。」

スパーン

千冬　「席に戻れ。」

セシ　「は、はい。」

三時間目

千冬　「授業の前にクラス代表を決めようと思う。自他推薦は問わない。誰かいないのか。」

『私は織斑君を推薦します！』

『私は林君を推薦します！」

薄々感じていたが。

神・一　「「遠慮したいんだが！！」」

千冬　「自他推薦は問わないと言ったし、他にいないならこの二人から選ぶからな。」

神　「少し俺の話しを聞いてくれ。」

全員が俺を見る。

神　「俺にはやりたい事がある。」

千冬　「やりたい事？」

神　「それは生徒会長と戦う事だ。」

『『『生徒会長と戦う！？』』』

千冬　「なんだ生徒会長にでもなりたいのか？」

神　「違いますよ。俺はただ最強の称号に興味があるだけですよ。」

山田　「じゃあ、林君はクラス長をしている暇は無いですね。」

千冬　「そうだな。じゃあ織斑で決定で良いか。」

セシ　「待って下さい！納得出来ませんわ！」

神　「今更立候補か？」

セシ　「うるさいですわよ！代々、こんな文化に乏しい国にいるだけで苦痛なのにあろうことに、こんな極東の猿がクラス代表をするなんて恥ですわ。」

カチン、ブチ。

もう我慢の限界だ。

一　「イギリスだってたいして自慢無いだろ！世界一不味い国何年制覇だよ！」

神　「古い事しか自慢が無いやつがうっせんだよ！黙って化石になっちまえ！また一つ自慢が増えるぞ！」

セシ　「わ、わたくしの祖国を侮辱しましたね！」

神・一　「「そっちが最初に侮辱してきたんだろ！」」

セシ　「け、決闘ですわ！」

神　「一夏の練習相手に丁度いい。」

セシ　「わたくしが練習相手ですって！？」

神　「俺がやっなら虐めになっちまう。」

セシ　「ＩＳを一回動かしたぐらいで。」

神　「１５６０、を『打鉄』でやった場合。」

セシ　「何ですかその数字わ？」

神　「擬似ＩＳ起動プログラムで『打鉄』を使って『ブルーティアーズ』を倒した回数。」

『なんでそんな物があるの！』

神　「俺は昔篠ノ之博士の助手をしていた時があってな。」

クラスが騒ぐ。

神　「はっきり言って、お前は俺の相手にならない。」

セシ　「だったらそちらの猿からお相手してあげますわ。」

神　「いけるか一夏？」

一　「お前がそう言うなら大丈夫だ。」

神　「おう。俺が勝たせてやるから。」

一　「任せたぜ。」

神　「任せろ。」

入学1日目の午後

昼休み

神　「一夏飯食いに行くぞ」

一　「そうだな。」

「織斑君と林君も食堂に行くの？私達も一緒にいい？」

神　「あぁ。別に良いぜ。」

一　「あ、ちょと待ってて。」

その後は原作通り。

放課後

神　「一夏、お前かなり身体なまっているだろ？」

一　「そうだな。最近全く剣道をしていないな。」

神　「だったら・・・・・箒、一夏の練習相手をしてやれよ。」

箒　「な！？」

一　「よろしくな。箒。」

箒　「なぜ私が？」

神　「一夏に剣道の稽古の相手が出来るのは箒だけから。」

と、言いつつアイコンでは、

神　『お前の為に機会を作ってやってるんだぞ。」

箒　「まぁ、そんなに言うわれたらしょうがないな。」『すまん。恩に着る。』

神　「じゃあ俺は帰るから一夏、箒と二人で練習してこい」

そう言って俺は教室から出た。

神　「あ、そうだった。」

携帯を取り出して、

ある人に電話をした。

「もしもし、珍しいね。かっくんから電話してくるなんて。」

神　「束さん。擬似プログラムを送って下さい。どうせ束さんの事だから一夏の『白式』はギリギリまで送らないでしょ？」

束　「流石、かっくん。私の考えていることや送る機体まで分かるなんて、やっぱり愛の力かな。」

神　「・・・・・それと『アレ』もお願いします。」

束　「分かった。明日には届く様にするよ。」

神　「ありがとうございます。」

そう言って電話を切った。

神　「さてと部屋に行くか。え～と、俺の部屋は１０２６号室か。」

あ、一夏の部屋聞くの忘れた。ま、良いか。

神　「１０２６、１０２６あったこの部屋か、」

ガチャ。

神　「お～。スゲー。まるで高級ホテルだな。」

神　「・・・・・今日は色々疲れたからもう寝るか。」

その頃一夏は、

一　「まだやるのか！？」

箒に容赦無くやられていた。

セシリア戦の前（前書き）

は～。
なんか疲れてきた。
まぁ、いっか。じゃあどうぞ。

セシリア戦の前

次の日

神　「一夏行くぞ！」

一　「ちょと待って！？」

今、俺達はアリーナで練習をしている。

俺がラファールを一夏が打鉄を使っている

神　「一夏！弾を全部避けろよ。」

一　「この数は流石に無理！！」

そんな事を言っている一夏にお構い無しでアサルトライフル、ショットガンを連続で打ち続ける。

練習終了後

一　「神録、あの数を避けるのは無理があるぞ。」

神　「あれで良いんだよ。じゃあお前は弾道予測が出来るのか？」

一　「無理です。」

神　「だろ。まずは弾の早さに慣れて少しでも避けられるようにしただけだ。」

一　「だけどよ。」

神　「あ、箒明日から一夏に稽古をやってくれ。」

箒　「あぁ。分かった。」

神　「よろしく頼む。じゃあ俺は部屋に戻っているな一夏、箒。」

♪♪♪♪♪♪♪

あ、俺の携帯が鳴っている。電話の相手は織斑先生

神　「もしもし。どうしましたか織斑先生。」

千冬　「神録、今お前のＩＳが届いたから第三アリーナに来い。」

神　「了解。」

俺のより一夏のを送って下さいよ束さん。

神　「織斑先生来ましたよで、それが俺のですか？」

千冬　「あぁ。来たか。そうだコレがお前のＩＳだ。」

俺のＩＳどっからどう見てもガンダムのエクシアにしか見えない。

神　「何って名前なんですか？」

千冬　「ちょと待ってろ。・・・・・コレ。」

神　「え～と。『ハロハロ！！あなたのＩＳの名前はリペリアだよ。じゃあね～ｂｙウサミミ・・・・・だって。」

千冬　「は～。神録使って来い。」

神　「了解。」

リペリアに乗ってピットから出でみた。

神　「うっ。飛行が不安定だな。・・・・・これでよし。さてと武器を確認するか。」

武器欄を見たら・・・・・ガンダムエクシアの武器だった。

神　「う～ん。じゃあＧＮサーベルを。」

武器はやっぱりアニメどうりだった。

神　「もう見る必要は無いな。どうしようか」

【ホーマット完了。ＯＫ】

ポチっな。

神　「これでこの機体は俺になったのか。・・・・・織斑先生。もう上がっても良いですか？」

千冬　「あぁ。戻って来い。」

神　「さて、帰って寝ますか。」

ＺＺＺＺＺＺＺ

一方。一夏は隣の部屋で、

一　「箒、箒さん。これは誤解だから」

箒　「天誅！！！！！」

一　「許してぇぇぇぇぇ。」

一夏は箒に半殺しにされていた。

セシリア戦の前（後書き）

どうでしたか？次回は一夏ＶＳセシリアです。次回もよろしく。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5953z/

インフィニットストラトスに原作ブレイク

2011年12月31日17時46分発行